

# 会報

NO 182 2023年6月号  
(令和5年仏暦2566年)

チェンライ日本人会発行  
事務局 jacr15ani@gmail.com

JaCR チェンライ  
日本人会  
SINCE 2004~

おめでとう御座います！！

桧山さんと荒井さん宅に去る  
5月12日会長と瀬戸さんが  
お祝に上がりました。

桧山さんに米寿のお祝い



荒井さんに喜寿のお祝い



後藤さんには総会時に喜寿の  
お祝いをさせて頂きました。



いつまでも お元気で！！

## ◆新入会員の紹介◆

なかやまけんいち

中山健一さん



日本人会の皆様、今度、皆様へ

のお仲間に入れさせていただく  
中山健一です。早く皆様に  
打ち解けられます様がんばり  
ますので、宜しくお願いた  
します。私の年齢は74才、  
1948年11月2日生まれです。  
趣味は、ジグソーパズルの組  
み立て、下手な将棋、一人で  
バイクの遠乗りです。私は、  
これからも、チェンカム郡  
ファイ、クアンに住む予定で  
す。私の日本の生まれは、  
長野県長野市川中島町です。  
川中島町としては、全国的に  
有名な川中島白桃が有ります。  
この川中島白桃を最初に  
栽培した方は、池田正元さん  
とって、素晴らしい方で、  
特許権をとろうとせず、どの  
地方にも無許可で、栽培法を  
広めた川中島町民が誇れる、  
素晴らしい方です。又、近く  
には、川中島古戦場が有ります。  
上杉謙信と武田信玄が戦  
った場所が有ります。

お譲りします！！

会員の宮崎様（御住所:A.Pad Daet Chiangrai）より、中古洋食器をお譲りしますとの事です。  
携帯番号 064-3266-443



長野市大門町には、善光寺が有ります。7年に一度の御開帳が有ります。あまり混雑するので、地元の人達はいきません。

どうして 私がタイに住んでみたいと思ったか、皆さんにお話したいと思います。私は、小さい子どものころは、鼻水を垂らして、チャンバラやったり、魚取りしたりで、楽しく過ごすことができました。貧乏はしてましたが、楽しく過ごすことが出来ました。ただ、両親は働く場所がなくて大変だったです。そんな昔の風景が、タイの現在の風景にマッチして、タイに住んでみたいと思いました。

こんな私ですが、よろしくお願いたします。



ゆぐちしょうじ  
湯口昭治さん



皆さんこんにちは、昨年8月末に、チェンライに戻りました、

湯口 昭治です。

2019年初め、日本に住んでいた家内が急病との連絡があり、慌てて日本に戻りました。家内は、その後、順調に回復、2020年1月にタイに戻りました。

その後、コロナ対策の為の入国、出国の条件が厳しくなり、簡単にタイに戻ることが難しくなりました。そのため、家内を追って戻る予定が、4年弱日本に住むことになりました。

昨年8月にやっとコロナ規制が解除されたのを、機会にタイに戻りました。

私は、大学の電気科を卒業後、電子部品の製造販売している会社に就職、その後、開放政策が始まった北京を皮切りに、イギリス領の香港、そして中国返還後の香港、そして中国蘇州での勤務と、30年ほど海外で、工場管理、販売管理の仕事を行い、定年後は、日本でマンション管理の仕事をしていました。

今回は、日本のアパート等を全て引き払い、タイに骨を埋めるつもりで来ました。幸い、土地も家も有りますので、年金でのんびりと過ごすことが出来そうです。

さて、時間が出来ると、大切な事は、何をするかに成ります。幸い、私は、高校生時代から始めた、映画鑑賞（主にアメリカの映画とアメリカの

ドラマ）、音楽鑑賞（クラシック音楽とフォークソング、主に中島みゆき、吉田拓郎、井上陽水等）それとオーディオ（一時期はかなり凝っていて、アンプ、SPと集めて少しでも良い音をと頑張りましたが、海外での勤務が多くなり、その国で出来る範囲で頑張っています、タイも同じです）趣味があり、今になっても継続しています。その為、毎日、好きな映画、音楽と楽しむ事が出来ますので、時間を持て余すことはありません、反対に足りない気分です。

是非皆さんも、長く続ける趣味を、持つ様に心がけられたら如何でしょうか。

折角の貴重な時間を無駄にしないために。

映画、音楽が好きな方、是非ご連絡を下さい。

お待ちしております。



しぎょうゆうじ  
執行裕司さん



究極の美を求めて！

成岡 卓翁

「酒と酒器のエキシビジョン  
物語」から抜粋

## 第二巻 意外な器との出会い

### ① 料理屋で包丁修行



オープンにしたものの、美味しいお酒に合う料理を提供できる訳が無い。グルメだったので成岡は地方から取り寄せる事で、他店に出来ない食材を提供しようと考えて居た。しかし、お客さんのニーズは「新鮮なお刺身と美味しいお酒」なのである。

幸い大泉副館長（本業は社会保険労務士）の仕事を、大阪・心斎橋の小料理屋「四季」の女将が、「簡単な包丁捌き位だったら教えて上げてもいいよ」と言って貰えた。早々に通勤途上の地下鉄御堂筋線の心斎橋駅で下車して、徒歩5分も掛からないお店に早朝お邪魔した。女将は大阪市中心区卸売市場に買い付けに行き、一旦仕入れた鮮魚類を店に持ち込み、その後自宅に帰って一寝入りするのを日課として居た。

鯛やヒラメにタコなどを買って居る。まずはタコの処理である。そこで「あんた！タコのオスとメスの見分け方知ってる？」と訊く。「いいえ、全然気にもして居ませんでし



た。」と答えると、「足の吸盤の不揃いなのがオス。綺麗に揃って居るのがメスやで。」そして「何で訊くか分かるか？分かれへんわな！オスの方が基本的には美味しいんや。足を活発に動かすから美味しいんよ。メスは子供を宿すから、栄養分がそっちに行くし、綺麗に見せてオスを引き付ける必要から吸盤は整列するんやで！」「そしたらどれ位の重量のが美味しいと思う？」と訊いて来る。それにも答え切れずにいると「3kg前後が一番美味しいんよ。」と教えて貰えた。

そして、網に入ったままの明石蛸をすり鉢に入れてスリコギで叩いてから取り出し、胴体（我々が頭と思って居るのは胴体）をひっくり返して、墨袋や内臓を取り出すのである。素人には残酷な様に見える。それからすり鉢に戻して一握りの塩をぶっ掛けて、手で揉むのである。ぬるぬるする本体が白く泡立って来る。それを水道水で洗い流して、ぬめりが取れたのを確認してから沸騰したお湯の中に浸けるのであるが、普通の沸騰水で無い所がプロの技。酢50cc、薄口醤油100ccにお酒

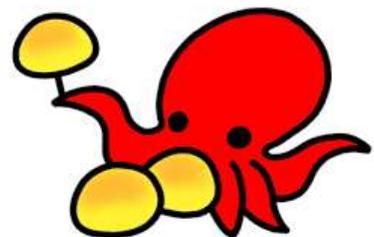
100ccを入れて、本来のタコの旨味を引き立てるのである。ここでまた質問された。

「明石蛸とはよく言うけど、徳島蛸とは余り聞かんやろ。何でか分かれへんやろな！」そこで「何でですのん？」と訊き返すと「味が違うんよ。はっきりした事は別れへんけど、餌に違いが在るらしいよ。徳島言うたら「鳴門の渦潮」やろ。ゆっくり餌を食べてられへんのと違うかな？明石蛸はゆっくり美味しい餌を食べれるから美味しいよ。」

「漁師の世界では、瀬戸内科医の向こうとこっちで「タコ合戦」が在り、明石蛸が負けて徳島のタコが明石で上がる事が在るけど、味がちがうやて。」

その道の世界に生きる人達にはそれぞれうんちくが在るって言う事の様だ。

8本の足が丸まったら引き上げる。時間的には再沸騰したら引き上げのタイミングの様で、取り出しフックで吊るして置く。スーパーなどで売られて居る様なピンク色まで湯がくと台無しに成るのである。



\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

私たちの行動規範：

トムソン・ロイター「信頼の原則」

【チェンコーン（タイ） 21日トムソン・ロイター財団】

タイ北部の村に住むカム・トーンさん（48）は、毎年2月から4月になると近くを流れるメコン川に膝までつかりながら、川藻を集めている。売り物にしたり、家庭で料理に使ったりするためだ。



写真は2月撮影（2023年トムソン・ロイター財団/Rina Chandran）

トーンさんをはじめ、メコン川沿いで暮らす女性の多くは、何十年間も「カイ（シオグサ）」と呼ばれる川藻を収穫してきた。だが、中国がメコン川の上流に十数カ所のダムを設置してからというもの、収穫量は激減した。

複数の研究者は、ダムによって水流が変化し、カイやコメ栽培に欠かせない川底の沈殿物もせき止められていると指摘する。

「乾期は普通は、水が澄んでいて水位が低く、川に入ってカイを採ることが簡単にできた。でも今は、乾期でも水位が高くなり、収穫が難しくなっている」

地元の市場にカイを売って生計を立てているトーンさんは、両手いっぱいを持った糸状の緑藻を丸め、肩にかけたナイロン製の袋に入れながら、こうこぼした。

「以前よりもカイの収穫に時間がかかるようになってしまった。カイの量も減り、収入に影響するようになった」

タイ・ラオス国境にほど近いチェンコーンで暮らすトーンさんの収入は、乾期にメコン川の水位が下がり、カイも豊富に生息していた頃に比べ、3分の1にまで減少した。

トーンさんによれば、漁師である夫の漁獲量も減少しているという。

チベット高原から南シナ海へ約4350キロを流れるメコン川は、流域の中国、ラオス、ミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナムに住む数千万人の農業や漁業を支えている。

しかし、中国が水力発電のためのダム建設を拡大し、季節外れの洪水や干ばつを引き起こす懸念が強まっている。また、強力な国家を後ろ盾に持つ複数企業の手で東南アジア

最長の河川の未来が握られるようになったことにも、不安の声が出ている。

地元の集落や活動家からは、クリーンエネルギー推進の機運の高まりを前に、地元の懸念や不安が無視されているとの声が出る。

「上流に建設されたダムが、漁業やコメ栽培のほか、女性や高齢者の収入源となっている川藻の収穫に影響を及ぼしている」

活動団体「リバーズ・インターナショナル」のタイ・ミャンマー支部で代表を務めるピアンポン・ディーツ氏はこ指摘した。

「川が水力発電の動力源のためだけに使われてしまえば、大勢の命や生活に影響する。食料や伝統、習慣、生き方に関わる問題だ」



<ゴーストタウン>

石炭への依存を減らし、再生可能エネルギーを増やす方針の中国では1995年以降、「ランカン川」の名で知られるメコン川で10数基のダムが建設された。うち5つは、それぞれ100メートル以上

の高さがある「巨大ダム」だ。

中国はメコン川に流れ込む支流にも、少なくとも95基の水力発電用ダムを建設済みで、今後も数十基の建設を予定している。また、メコン川下流にある他国でのダム建設事業への資金援助も行っている。



下流域のタイ、カンボジア、ラオス、ベトナムからなる政府間機関「メコン川委員会（MRC）」の推定では、チベット高原や上流の中国・ミャンマーの「ランカン川（メコン川上流）」流域にある水力発電ダムで得られる電力は、年間約40億ドル（約5237億円）相当に上る。ただ、メコン川流域で計画されているダムが全て建設された場合、川の堆積物が上流で閉じ込められるため、同地域の主食であるコメの栽培に影響を及ぼしかねないと複数の研究で予測されている。

さらに、ダムが魚の回遊を止めたり水流を変えたりすることで生じる漁獲量低下の損失額は、MRCによると2040年までに230億ドル近くになると見込まれている。さ

らに、森林や湿地、マングローブの破壊による損害は1450億ドルにまで上る可能性もあるという。

メコンダムの監視を行う米シンクタンク、スティムソン・センターで「エネルギー・水・再生可能プログラム」を主宰するブライアン・アイラー氏は、チェンコーンのようにダムに近い集落での被害は甚大だと指摘する。



乾期にも発電のため貯水池から放水することで「通常の2～3倍の水量」が流れる一方、雨期は放水制限によって流量が半分以上減る可能性もあるとアイラー氏は分析する。

「これにより、タイ・ラオス国境の漁村でのゴーストタウン化が進んでいる」と同氏は続けた。

「こうした集落では環境の変化に適応する選択肢が少ない。高齢者が選べる生業は限られる。若い世代は移住したり、別の仕事で生計を立てたりするかもしれないが、順応するまでには様々なリスクを伴う」

MRC事務局はこうした懸念について、社会的影響を評価し、気温上昇や人口増加による影響も加味しながら、農業や集落に影響を与え得る流量や水質の変化を監視していると述べた。



また、MRC事務局は取材にメールで回答し、水力発電事業によるリスクを管理して悪影響を軽減すべく、「ダムの設計、建設、運営に関する科学的かつ技術的な指標」を策定しているとした。

ただ、活動グループはMRCについて、地元集落と協議していないと指摘。中国がダム建設に本腰を入れて以降、より頻繁に、より激しくなっている洪水や干ばつについても、中国に対する責任追及ができていないとしている。

2019年から21年にかけての干ばつでは、中国のダムが多大な水量をせき止めたことが原因でメコン川の水位が記録的に低下し、干ばつが悪化したことが、スティムソン・センターと環境調査会社「アイズ・オン・アース」の衛星監視による調査で判明した。

中国は降雨量が少なかったためだとして調査結果に反論。2020年には、年間を通じて自国内の流量データを共有することでMRCと協定を結んでいるとしている。



#### <エネルギー需要>

国際エネルギー機関（IEA）の2021年の報告書では、新興国や発展途上国における潜在的な可能性がとりわけ高いことから、水力発電は「低炭素エネルギー生成の主力」と評価している。

中国は世界最大の水力発電市場だ。IEAによると、中国企業は2030年までにサブサハラ・アフリカ、東南アジア、ラテンアメリカ地域における新規の水力発電のうち半数以上を担うという。

メコン川下流域のエネルギー需要は年間6—7%上昇すると予想され、「完全な水力発電開発」によって2040年までに1600億ドル以上の経済効果が見込めるとMRCは推測する。

ただ、住民が移住を強いられるなど、水力発電プロジェクトによる影響を懸念する声も世界中で高まりつつある。

ラオスでは2018年、建設途中のダムが決壊し、突発的な洪水で家が流され、数十人が死亡。「アジアのバッテリー」になることを目指していた同国で、水力発電のイメージに影を落とされた。



#### <「予想不可能な川」>

ラクチェンコーン保護団体のニワット・ロイケウ代表（63）は、何世代にもわたってメコン川に頼った生活を送って来た流域の集落の人々も、もはや川の側で暮らす術が分からなくなっていると指摘する。

「ダムがあつては、川の動きが予測不可能になり、これまで積み重ねてきた知識も無意味だ」とロイケウ氏は嘆く。同氏は2022年、ゴールドマン環境賞を受賞している。

スティムソンセンターとアイズ・オン・アースによるメコンダムの監視は、衛星画像とリモートセンシング技術を用いて、24時間以内に水位が0.5メートル増減した場合に、周辺のタイ・ラオス国境の集落に対して警告を行っている。

だが、こうした監視も他の選択肢を持たない集落にとってはほとんど意味が無い、とロイケウ氏は言う。同氏は地元の子供たちに川について教える「メコン学校」をチェンコーンで開催しているほか、研究者にも情報を提供している。

「人々が望んでいること、それは当然のことながら、包括的に協議をして川の共同管理を行うことだ」

4月まで続く現在の乾期でトーンさんはカイの収穫に注力している。運が良く数キロ採ることができた日には、一部を薄く延ばして日干しして乾燥させる。間食用として、市場でも高値がつく。

「毎日、収穫を終えて川を引き上げるタイミングも、一日にどれだけ収穫できるかもわからない。収穫できるときに可能な限り採っておかなくては」

